

7 春草なずなの騎乗位セックス。

春草「じゃあ、この辺に座すわって」

春草はるくさなずながソファのある場所ばしよを指さす。その場所というのは、ソファの中央ちゆうおうからやや上手側かみてがわとといったところだった。僕は「はい」と返事へんじして、大股おおまたを開ひらいてソファをまたぐように座すわる。

僕の体の向きは上手側かみてがわ……向かい側の壁がわに京森きやうもりアスカが立っている姿が見えた。春草はるくさなずなが僕と向き合う形かたちに座すわる。僕と春草はるくさなずなは股間こかんをぴったりとくっつけ合う。近付くだけで、オマンコにこもった熱気ねつきをおちんちんで感じられた。

春草「そーれ！」

春草なずなが僕の両肩を掴んで押し倒した。

僕は「わあ」とわざとらしい声を上げて、ソファに仰向けに転がった。でもちやんと僕の頭はソファのクッションの上になった。最初からきつとこんなふうには押し倒されるんだろうな、と察していたから自分が倒されても大丈夫な位置に座っていた。

春草なずなは僕を押し倒し、僕の両肩を掴んだまま、覆い被さってくる体勢になった。

春草「ごめんね。私、ちょっと嫌なこと言いますね」と前置きをして、一拍置いて、「君さ、後輩のくせに生意気なんですよね。先輩に対して、「してあげる」空気出し過ぎなんですよ。なに？

セックスの達人気分ですか？」

春草なずなは悪ぶった雰囲気を出そうとするけど、声が可愛らしすぎるし、逆に「良い子の感じが出てしまつて微笑ましかった。

アンズ「す、すみません」

僕も「先輩にいびられる後輩」の芝居を乗って、わざとらしく怯えた声を出した。

春草「アンズ君さ、君、経験豊富みたいな雰囲気出してんだけど、本当は1ヶ月前まで童貞だったんでしょ？ 私たちみんな知ってるんですよ。それまでずっと1人でおちんちんシコシコしていただけの子が、先輩気取りしちゃだめですよ。生意気です。今から私が、先輩の凄さを見せてあげるんだからあ！」

どうやら「凄もう」としているふうだけど……そんな空気を出そうとすればするほど、むしろ可愛くなっちゃう。そういう声遣いに慣れていないのがバレバレで、どんどん声がふにやふにやになっていた。

うーん、可愛い。でもここで笑っちゃダメだ……。

確かに僕は、ほんの1ヶ月前まで童貞だった。1人でオナニー動画をネットに公開していた。それが天宮しのに秘密を暴かれて、脅迫されて……。そう、たった1ヶ月程度の話だったんだ。そんな時の変遷を、ちよつと感慨深く感じる瞬間があつて――。

春草はるくさなずなが僕の股間こかんの上に、自分の股間こかんを乗せた。僕の陰囊いんのうにオマンコの割れ目わめを押しつけて、グリグリと刺激しげきする。うう……気持ちいい。感慨深かんがいぶかい気持ちきもちなんて、一瞬いつしゆんで忘れてしまった。

春草はるくさなずなは腰こしを前後ぜんごさせて、ヌルヌルヴァギナをおちんちんの上うへで滑すべらせてくる。ああ、この一いっ方的ぽうてきに快楽かいらくを搾しぼり取とろうとする感じ……たまらない。僕もゆるゆるとだけど、腰こしを動かしておちんちんを春草はるくさなずなのオマンコに押しつけた。でも春草はるくさなずなは良い子だから、体重たいじゆうで押しつけたりはせず、ちゃんと腰こしを浮うかせて、おちんちんを優やさしく撫なでるように刺激しげきしてくれた。

アンズ「うう……オマンコでおちんちんコスコスされちゃってる……ふわあ……気持ちいいです。なずなさんのオマンコ、ヌルヌルでいやらしくて、気持ちいい……」

僕は謔言うわごとのような言葉で呟つぶやいた。

見上げると、春草はるくさなずなの可愛かわいい顔かおがゆるりと赤あかくなって、情欲じょうよく剥むき出しの淫魔いんまみたいな

表情ひょうじようになつて僕ぼくを見詰みつめている。左手ひだりてへ視線しせんを移うつすと、甘川あまかわゆうこが立つて僕ぼくを見ている。

ただ見ているだけだけど、その表情ひょうじようにはつきりと好色こうしよくさが浮かんでいた。右手みぎてへ目を向けると、たくさんの女の子が、押し倒おたおされて、一方的いつぱうてきに股間こかんをグリグリされている僕ぼくを見下ろしている。みんなその顔かおに欲情よくじようの色いろを一杯いっぱい浮かべて、僕ぼくを性せいの対象たいしやうとして見下ろしていた。

はああ、なんていい光景こうけいなんだろう。僕は改あらためて女の子達おんなこどもたちに見みられている状じやうきやう況きやうを認にん識しして、背せ中なかをゾクゾクとさせる。

春草「うふふ……おちんちん、こんなに一杯いっぱいヨダレたらしちやって……。いやらしー子こ。こんなスケベなダメちんちん、徹底てつてい的にいじめてあげるんですから」

春草はるくさなずなはニヤニヤしながら、少すこし上擦うわった声こゑで僕ぼくをなじってくる。

春草はるくさなずなが僕ぼくの陰囊いんのうに股間こかんを押しつけて、ゆるゆると腰こしを震ふるわせた。すると僕ぼくのおちんち

んは僕ぼく自身みづかのお腹なかにペチペチと当たって、そのたびに亀頭きとうにまとわりついたトロトロしたいやらしい粘液ねんえきが飛とび散ちった。

春草なずなが腰の動きを止めて、僕のおちんちんをつまむように持ち、自分の腰を持ち上げた。

いよいよだ……僕は期待で高鳴る。

春草なずなはもったい付けるように、僕のおちんちんを自分のクリトリスのところに当てて、軽くクリクリして快楽を貪ると、ようやくいやらしい割れ目へと押し当てる。僕は亀頭で、割れ目から放たれるいやらしい温度を感じた。

亀頭がヴァギナの中へと潜り込んでいった。生々しいぬめりが僕を包む。

アンズ「うあああ……」

すぐにでも凄い圧迫感が迫ってきて、僕はたまらず身をよじらせてしまった。

春草「あう……うううん……」

春草なずなもたまらないらしく、開けっぱなしの口から力の抜けた声を漏らす。

春草なずながゆっくりと腰を沈めていく。僕のおちんちんがじわじわとヌメヌメに包まれて

いき、ついにおちんちん全体がオマンコの中に収まった。

それだけで僕たちは感極まって、「はあはあ」と喘いでしまった。

春草なずなのオマンコは、彼女のイメージ通りに狭くてきつくて、おちんちんでもその小ささを感じた。でも無理に入れている感じでもなくて、オマンコ全体できゅつと絞り、かつ淫猥に貪ってくる感じ。少女と大人が同居しているようなオマンコだった。

春草「はあ……すごい。本物はこんな感じなんだ。暖かいし、生きてる感じがする……。ねえねえ、私の、どんな感じ!」

春草なずなは感激したように声を上擦らせ、子供のような無邪気さで僕に尋ねてきた。

アンズ「なずなさんのオマンコは……なずなさんって感じですよ」

僕はハアハアと喘ぎながら、春草なずなを真っ直ぐに見詰めて答えた。

春草「もう、なんですか、それ!」

春草なずなは恥ずかしそうに笑って、僕の胸とぺちんと叩いた。

でも本当に春草なずなのオマンコは、春草なずなになって感じだった。僕のおちんちんが僕みただ、というくらいに。小さいのにすごくスケベに欲張り。こんなオマンコにおちんちんを入れてみると、春草なずな自身で包まれているという気がした。

春草「じゃあ、動きますよ」

春草なずながゆるりとした言葉で宣言した。

春草なずながゆっくりと腰を動かし始める。僕のお腹に両手を置いて、腰全体をぐるりぐるりと縦に回転させる感じで、動き始める。僕と春草なずなの股間の間で、いやらしい肉棒がピストンし始める様子が見えた。ぬちやぬちやといやらしい粘液の音が聞こえ始める。女の子達の「わあ」という熱気のコもった声あげた。

僕は春草なずなとセックスができた！ ……という感激で高鳴っていたけれど……まずい。

もうイキそう。射精しそう！ 春草なずなのオマンコが、かなり強めに僕のおちんちんを絞ってくる。腰の動きだけではなく、膣口の肉壁も意思を持ったように蠢いて、おちんちんを強烈

に絞しぼってくる。でも「きつい」感じじゃなくて、ロリっ子を装よそおいながら、スケベに絞しぼってくる感じ。……気持ちいいけど、あつという間に射精しゃせいしちやいそうだ。

こ、これじゃダメだ。こんなに気持ちいいオマンコで絞しぼられると……。すでに挿入そうにゅうまえ前から一杯刺激いっばいしげきを受けてきたから、このペースでいくと、僕のおちんちん暴発ぼうはつしちやう。僕が射精しゃせいしてしまう前に、なずな先輩せんぱいをイカせてあげないと……。生意気なまいきな後輩こうはいだと言われてもいい。なずな先輩せんぱいの初体験はつたいけんを良い思い出にしてあげなくちや……。！

僕も腰こしを動かし始めた。春草はるくさなずなの腰こしのタイミングに合わせて、腰こしを突き上げる。反撃はんげき……。のつもりなのに、そうすると僕のおちんちんも気持ちいい……。下手へたに動うごいたら射精しゃせいしちやいそうだけど、我慢がまん、我慢がまんだ……。！ 僕が春草はるくさなずなを絶頂ぜつちようさせてあげないと……。

すると、春草はるくさなずながどすんと腰こしを落おとして、僕の動きうごを封ふうじてしまった。

春草はるくさなずなが僕に頭を近付けてきた。

春草「ダメですよ。後輩君こうはいくんは何もしなくていいんです。先輩せんぱいのことを気持ちよくさせてあげ

ようなんで、思わなくていいですからね。後輩君はなににもせず、そこに寝転がって、先輩がしてあげることだけを受け入れていればいいんです」

春草なずなが可愛らしい声を沈めて、そう囁いた。幼い顔と声に、いやらしい痴女が浮かび上がってくる。

アンズ「は、はい……」

嬉しいけど……でも先輩には先輩のプライドがあるから……。受け入れよう。でも射精は我慢しよう。

春草なずなは元の姿勢に戻り、僕と両掌を握った。

とそこに、甘川ゆうこの頭が僕の胸の側へと割り込んできた。僕は左手を春草なずなから離し、甘川ゆうこの肩に置いた。春草なずなも右手を甘川ゆうこの肩に置く。

甘川「じゃあ私はアンズ君のお胸を気持ちよくしてあげるね」

と僕を上目遣いに見つつ、僕の両乳首を指で軽くつまんだ。

甘川あまかわゆうこが僕の胸むねに頬ほおを押し当てて、舌したをすつと伸ばして、僕の左乳首ひだりちくびをチロチロと刺激しげきし始めた。右乳首みぎちくびを指先さきでさらさらと擦こすり始める。

春川「それじゃ、動きうごますよ〜」

春川はるかわなずなが楽しげたのに言いって、腰こしを動かし始めた。さつきみたいにゆっくりなペースで、ぬちやぬちやと股間こかんの粘液ねんえきを擦こすらせて音を立てる。オマンコの中なかがくつきりとした質感しつかんを持って、僕のおちんちんを絞しぼり始める。

アンズ「んっ……くっ……!」

気持ちいい。おちんちんも、乳首ちくびも気持ちいい。こんなにされちや……あつという間に射精しゃせいしちやう……! でも我慢がまんしなくちや。僕は目めを閉とじて、歯はを食くいしばった。目の前まへの気持ちいいに理性りせいを持って行いかれないよう、懸命けんめいに踏ふみとどまった。僕の全身ぜんしんがピンと張はって、自然しぜんと足あしの指ゆびにも力ちからが入いる。

甘川「ほら、どうしたの? みんなに今の気持ちきもち伝つたえなくちや。みんな退屈たいくつしちやうよ。ほら、

どう？ はずなのオマンコ。気持ちいい？」

甘川ゆうこが僕の少し顔を寄せて、ネットリとした言葉遣いで囁く。

僕は目を開けて右手側を見た。たくさんの女の子達の視線とぶつかった。眩暈がしそうだった。おちんちんの気持ちよさと、可愛いロリっ子先輩に絞られているという状況を自覚して、それだけで気が狂いそうなくらいの陶醉を感じた。

アンズ「はあ、はあ……。んん、はあっ……。お、おちんちん、おちんちん凄くて……。はずなさんのオマンコ、すごく狭くて……。ああああおちんちん絞られちゃう……。！ はあ、はあ、おちんちん気持ちいい、気持ちいいですうううう！」

僕はこれまで以上に脳の検閲を通らない言葉を撒き散らした。本当に気持ちよくて、その気持ちよさに意識のすべてを引きずられないように堪えて、するとどんどん思考がバカになっていく感じがあった。

僕は春川なずなを見上げた。春川なずなの可愛い顔に、急にずっと年上のいやらしい女の顔

が浮かぶのを感じた。春草なずなの本性はどつちだろうか……そんなことももう考える力もなかった。

アンズ「なずなさんのオマンコ、オマンコ……おちんちんの圧迫が凄くて……好き！ 気持ちいい、気持ちいいいいいい！ 射精しちゃう、射精しちゃういそう！ 好きいいい！ はあああ、でも我慢しなくちや、精液でちゃうの我慢しなくちや……」

僕は頭に浮かんだ言葉をそのまま口にする。こうやって口にするから、思考が頭からすり抜けて、バカになっていくのを感じた。どんどんバカになって、バカになるほど気持ちよさで高まっていく気がした。

でも、射精だけは……射精だけは我慢しなくちや……。僕は股間に凄まじい熱気が高まっていくのを感じたけれど、お尻に力を入れてこらえた。

そんな僕の反応に満足したのか面白かったのか、春草なずながふふつと笑った。春草なずなのロリ顔に、くつきりと大人の顔が浮かぶ。

春草はるくさなずなが腰こしを大きく、早く動かし始めた。僕ぼくと春草はるくさなずなの股間こかんがぶつかり合って、パツンパツンと強めの音を鳴らし始めた。汗あせが飛び散る。股間こかんと股間こかんの間で、おちんちんが素早すばやく出たり入ったりを繰り返す。じゅぶじゅぶと泡立あわだつような音おとを立てていた。

僕は春草はるくさなずなの姿すがたを見ようと顔かおを上げた。亜麻色あまいろの、ふわふわした髪かみが上下じょうげに揺れていった。はあはあと喘あえぐような息いきを漏もらしている。視線しせんを少し下うつに移すと、細ほそい体からだに不釣り合あいなほど大きいバストが、ダイナミックに弾はじんでいる様子ようすが見えた。

アンズ「はああ、オツパイ……なずなさんのオツパイ好きですうう！ なずなさんのオツパイ可愛いかわいい！ おちんちん気持ちいいいいい！」

僕はヨダレを垂たらしながら、見えたものを、感じたものを順番じゆんばんに口くちまわから漏もらす。口周くちまわりのものがぜんぶダダ漏もれだった。

春草「いいよ、いいよ！ 変態君へんたいくん！ 変態君へんたいくんの好きなところをみればいいんだよ！ みんな見えますから、変態へんたいな姿すがたを晒さらして、射精しゃせいしちやいなさい！ ああ、でもまだダメですよ！ 我が

慢我慢。我慢するほど、射精はどんどん気持ちよくなるから、我慢ですよ！」

春草なずなは体全体を揺らしながら叫ぶけれども、やはり快樂でたまらなくなっ言葉はふにやふにやだった。滑舌もだいぶ怪しくて、言っている内容も怪しかった。きつと僕も同じようにふにやふにやになっているに違いなかった。

アンズ「はいいい、僕、気持ちいい我慢しますううう！先輩と一緒におちんちん気持ちよくなりますううう！」

僕は叫びながら、もう我慢できなくなっ自分でも腰を振り始めた。春草なずなは僕が腰を動かすのを止めようとしなかった。春草なずな自身、今より強い快樂を求めていた。僕は春草なずなとタイミングを合わせて、腰を突き上げる。突き上げるたびに、股間全体で猛烈な快樂が迫ってくる。パツンツと音を響かせるたびに、快樂が波となっ迫ってくる。その波を浴びるたびに、僕の意識はボチャンと海に沈むような感じがあった。

アンズ「ああああ、凄い！僕、おちんちんになってる！おちんちんになって、なずなさん

の中に入っていくううう！」

僕は何を口走っているのだろうか？ 意味がわからない。わからないけど、とにかくも叫んでいた。

でいた。

ただ感覚として、腰を突き上げるたびに僕の身体は溶けて、おちんちんだけに集約され、春草なずなどオマンコを通して一体となっている感覚を味わった。セックスの最中僕は何かを超越したような——「悟り」だろうか？ そういう境地に行き着いていた。

春草「ふううん、私も気持ちいい、本物おちんちん気持ちいい！ オマンコ凄い、こんなに気持ちいいの初めてええ！ 本物おちんちんいいよおお！」

春草なずなも思ったままの言葉を口にしていた。ああ、なずな先輩もバカになっている。一緒にバカになっている。一緒だ、と思うと愛らしく感じた。

おちんちんも股間も、凄まじい熱気だった。快楽が僕自身の肉体を溶かしていく。ただただ夢中になって、お互いをむさぼり食っている感覚があった。

アンズ「なずな先輩、好き！好き！好き！好きです！好きですうううう！」

僕は腰を突き上げながら、夢中になって叫んでいた。

春草「私も好き！好きだよ、アンズ君！変態君大好き！おちんこ大好き！はあああ、気持ちいい！オマンコ気持ちいい！おちんちん気持ちいい！ううううん、来るよ、凄いい気持ちいいが来るよおおお！」

春草なずなは腰を振る勢いを強めながら、思うままに叫んだ。叫びつつ、全身でビクビクと痙攣していた。僕はおちんちんで、春草なずなの体の内側で起きている熱気を感じた。

僕はさらに勢いよく腰を突き上げた。春草なずなも強力に腰を打ち付けてくる。甘川うこが僕の両乳首を指で弄りつつ、僕の首筋にキスをした。

ああ、凄い、凄い、凄い！気持ちいいい！

僕の股間に、熱気が集まってくる。体が燃えあがるようだった。もう僕自身で、その熱気を留めることはできなかつた。

アンズ「あああああ、射精しゃせい！ 射精しゃせいします！ なぜな先輩せんぱい、射精しゃせいしますうううう！ 精液せいえきでちやうううう！」

心こころに門扉もんびのない僕は、叫さけんだ。

春草「いいよ、私もイクから！ 射精しゃせいして！ 私のオマンコに変態精液へんたいせいえきぶちまけて！ はああ

ああオマンコ気持ちいい！」

春草はるくさなずなも叫さけんだ。

快樂かいらくが飛礫つぶてになって駆け上がった。まるで大滝おおたきが逆流ぎゃくりゆうする感覚かんかくだった。

どぴゅ！ どぴゅ！ どぴゅ！ どぴゅ！ どぴゅ！

猛烈もうれつな快感かいかんと痙攣けいれんが僕ぼくを襲おそった。これは射精しゃせいなのだろうか。股間こかんに凝縮ぎようしゆくした熱ねつが、濁流だくりゆう

となって解とき放はなたれていた。射精しゃせいよりも大きなものが激はげしく噴ふいた感じかんじ。「噴火ふんか」って感じだ

った。それが春草はるくさなずなの小さなオマンコの中に溢あふれ出だしていた。もはや形容けいよう不能ふのうな快樂かいらくが、

おちんちんから放はなたれて僕ぼく全身ぜんしんを包つつんでいた。窓まどから差さす光ひかりがその瞬間しゆんかんは強烈きやうれつな光ひかりを持つ

て部室全体を明るく照らしているように感じられた。

春草なずなも全身で痙攣していた。僕は春草なずなの痙攣を自身の内側で感じていた。おちんちんで繋がっていたからだろうか、心と心で繋がっている感じがあつた。

春草なずなもきつと耐えがたい快感を感じていたはずだけど、僕の顔を、目をじつと見ていてくれた。おかげで僕たちは股間だけではなく、気持ちでも繋がっている感じがした。

快楽の津波が僕たちを飲み込み、異世界へと連れて行き、でもその天界的陶醉はゆらりゆらりと引いていく潮のように、ゆっくりと僕たちを現実に引き戻していく。

次第に僕の意識は僕自身に戻ってきた。夢心地な快楽が終わって、現実に戻ってくる感じがした。僕はハアハアと息を漏らしながら、春草なずなの姿を見ていた。春草なずなも、僕を

じつと見ていた。白い肌が全体的にじわりと赤く、汗が一杯に浮かんでいた。春草なずなは涙とよだれと鼻水を一杯に垂らしていた。何もかも解放しきったような、だらしない顔……でも

それが僕には神々しく感じられた。

僕の胸むねに頭あたまを乗のせていた甘川あまかわゆうこが、春草はるくさなずなを振り向き、促うながすように頷うなずいた。

甘川あまかわゆうこの体が引ひつ込んだ。春草はるくさなずなの体がすつと僕ぼくに被かぶさり、顔を寄よせてきた。

春草「大好きだよ、変態君へんたいくん」

アンズ「僕もです。大好きです」

僕たちは感情かんじょうを込こめて囁ささやき合い、キスをした。唇くちびるを押し付け合い、唾液だえきをダラダラ流ながし込こむようなキスをした。

セックスの瞬間しゅんかんの恍惚こうこつはもう僕たちにはなかつたけれども、でも一緒いっしょに天国てんごくへの階段かいだんを駆け上のぼった「仲間なかま」という意識いしきが僕たちぼくに芽生めえていた。ただただ愛いとおしかった。

そんな愛情あいじょうたつぷりのキスを見て、女の子達おんなこどもが「わあ」と密ひそやかな歓声かんせいを上げた。その歓声かんせいが優やさしくて、僕はみんなの優やさしさに抱だかれるように、春草はるくさなずなとキスをした。

8 甘川ゆうこと春草なずなのダブルフェラ

春草「はあ……凄かった。この中で射精される感じってこんなだったんだ。ペニスバンドとぜ

んぜん違う……。ここだけじゃなくて、温かいものが全身に広がっていく感じ……。良かった……。アңыз君、おちんちんありがとうね。私、嬉しいよ」

春草「はあ……余韻に浸るように言い、自分のお腹を撫でながら、まだオマンコの中にあるおちんちんの感触を確かめるように、ゆらりゆらりと腰を揺らす。

うう……。そんなふうには揺されると……。僕のおちんちんは射精直後で固さを失っていたけれど、揺されると膣壁がぬらぬらと僕のおちんちんを刺激する。……。あつ、おちんちん、ピクピクしちゃう……。！

春草はるくさなずなが、僕みを見下ろしてニヤツと悪戯いたずらつ子の微笑ほほえみを浮かべた。……バレちゃうよね、おちんちんピクピクさせちゃったって。

春草はるくさなずなが右足みぎあしを地面じめんに付けて、少し慎重しんちょうに腰こしを持ち上げた。甘川あまかわゆうこがふらつかなように、手助けてだすした。オマンコの中からおちんちんが滑り落ちて、僕のお腹なかにぺたんとな崩れくずた。おちんちんと一緒いっしょにどろりとした粘液ねんえきが一杯いちばいに吐き出はされて、僕こかんの股間こかんやお腹なかに広がっていく。

僕はまだ熱ねつっぽくハアハアと喘ぎあえながら、何となく自分の股間こかんに広がる粘液ねんえきに触ふれて、指先ゆびさきに絡からめてみる。指先ゆびさきですくい上げると、つーっと粘性ねんせいを持った糸いとを引いて、それが黄昏たそがれの輝かがやきにツヤツヤ光はなを放はなつ。僕こかんの股間こかんを覆おおった粘液ねんえきも黄金色おうごんいろに輝かがやいていて、その輝かがやきは僕ぼくの股間こかんを水源すいげんに、四方しほうへねつとりと糸ひを引きながら、僕の身体からだという地形ちけいから滝たきのように流れ落ちようとしていた。僕は股間こかんにまとわりついた粘液ねんえきに幸福こうふくの残滓ざんしを感じたけれど、春草はるくさなずなど離はなれてしまったという事実じじつも感じて、寂さびしい気持ちきもちに入れ替かわるような気がした。

春草「ほら、立って。まだ元気あるでしょ」

春草なずながまだセックス後の陶酔でまどろんでいる僕を覗き込んできた。まるで元気な女の子がお父さんを起こす時のような感じだった。

僕はコクリと頷き、上体を起こした。少しフラフラする。甘川ゆうこと春草なずなの2人が僕を立ち上げるのを手助けしてくれた。

春草「ほら、こつち」

僕はソファの向こう側、ステージと正面を向く位置に誘導され、立つことになった。ソファには下手側から甘川ゆうこ、春草なずながステージに対して背中を向ける体制で並んで座った。

え……次はなんだろう。

僕は戸惑いを覚えながら、視線を下に向ける。甘川ゆうこと春草なずなが微笑みを浮かべながら僕を見上げている。一方は母性的な温もりを湛え、一方はあどけない元気なロリっ子を湛

えている……2人は同じ年のはずだけど、こうして見るとまるで母子のような……疑似母子井……もちろんぜんぜん違うのだけど、僕の脳内では2人のイメージから疑似母子井に転換して  
いた。

そんな2人が、僕の粘液でベトベトになったおちんちん前に並んで座っている……僕は何となく察して、期待して、その期待を映しておちんちんをヒクヒクさせ始めてしまった。

甘川ゆうこと春草なずなが同時に僕のおちんちんに手を伸ばしてきた。2人は両手を重ねて、僕の陰囊を下から持ち上げるように手を添えて、揉みはじめた。

春草「うわあ、すごいネバネバ。おちんちん、変態汁のあんかけだね」

春草なずなが楽しげに言って、僕を見上げてくる。本当に年上だとは思えない可愛い顔……そんな顔で、僕を見上げるのがたまらない。

それに僕の股間はほんとうにネバネバのトロトロだった。2人との連続セックスで愛液が一杯塗布されている上に、自分が吐き出した精液も絡んでいる。確かにもはや「あんかけ料理」

のようだった。

甘川「このおちんちんで、私たち2人といやらしい気持ちにさせてくれたのね。ありがとう。

うふふ、こんな肉の棒ひとつであんなに幸せな気持ちになれるのってなんだか不思議」

甘川ゆうこが僕のおちんちんを掌に載せて、その先端にチュツとキスし、そこから亀頭の上を唇でなぞりながら、ちゅーっとおちんちに塗布された粘液を吸った。

甘川ゆうこの唇が離れる。すると、ネバーツとした粘液が唇にまとわりついて糸を引いた。粘液はなかなか切れそうにない。春草なずながあつと声を上げて、ねばりを自分の舌で絡め取って、そのまま唇を甘川ゆうこに近付けて、キスをした。春草なずなは甘川ゆうこの唇を舐めて、ちゅっつとキス音を立てる。

そ、そんなエッチな姿を見せられると……。

僕はセックス後の賢者モードがスキップして、ゾクゾクと高まるものがあつた。そのゾクゾクは僕自身より早くおちんちんが反応し、甘川ゆうこの掌の中でムクムクと大きくなり始め

た。

甘川「あんなに激しくセックスしたのに、すぐに大きくなるんだね」

そのおちんちんを掌に載せている甘川ゆうこが、大きくなっているのに気付かないはずもなく、楽しげに僕を見上げてきた。おちんちんはあつという間に太さと固さを取り戻していき、早くも甘川ゆうこの掌からはみ出すほどのサイズに育つていこうとしていた。

アンズ「だって、可愛い女の子が目の前にいてくれるから……嬉しくて」

セックス後の寂しさはもう僕の中にはなく、暖かな幸福が僕の中に芽生えようとしていた。

そう、勃起は幸福をもたらす。勃起している間、僕は幸福なんだ——！

甘川ゆうこと春草なずなが分担して僕のおちんちんを刺激し始めた。甘川ゆうこが僕のおちんちん本体を両手指で包むように持ち、シコシコと前後させ始めた。春草なずなが僕の陰囊を軽く握り、マッサージをする。そうしながら、会陰をくすぐるように刺激してきた。4本の

掌と20本の指が同時に僕の股間をくまなく刺激してくる。

アンズ「はああ、そんなふうに触られちゃうと、僕、また勃起しちゃう……おちんちん大きくしちゃう……」

僕はハアハアと熱っぽいと息を漏らしながら、低く呟く声で、でもここにいるみんなに聞こえるはつきりした調子で言った。

股間から快樂の波動がビクンビクンツと全身へと這い上がってくる。僕は短時間で4回も射精して疲労も感じていたけれど、そんな僕とは裏腹に、股間は新たな情欲を求めてムクムクと大きくなる。

アンズ「僕、あんなにたくさん射精したのに、あふう……おちんちん大きくなっちゃうと、大きくしちゃうと……」

僕は気持ちよすぎて体がふにやふにやになって、少し前屈みになる。僕の体内で建設再開が始まった「理性」はただちに解体撤収を始める。

おちんちんはなおも大きくなり、角度を高めていった。おちんちんの全体に、2人の掌と指

を感じる。しゅにしゅにとおちんちんの皮が前後する感覚。繊細な指が陰囊と会陰と肛門をさ  
らりさらりと触れてくる感覚。刺激の一つ一つが衝撃となつて僕を襲い、僕はそのたびに体  
をクネクネとさせる。

春草「どうなっちゃうの？ この変態おチンポが大きくなっちゃうと、どうなるの？ みんな  
に聞こえるように言つてごらん」

春草なずなが可愛い声で、意地悪に問いかけてくる。

アンズ「僕、いやらしいことしたくなっちゃう……」

僕は胸の内が熱く高まつて、声を上擦らせてしまった。

甘川「いやらしいことつて、どういうことなの？ 私たちに詳しく聞かせて欲しいわ」

甘川ゆうこが絵本の読み聞かせをする母性的な声で促してくる。

アンズ「セ、セックス……セックスがしたくなっちゃう……」

もう何度も「セックス」というワードを口にしてきたはずなのに、こんなふうに攻められる

と詰つまってしまいそうなくらい恥はずかしくなる。

甘川「ふうん……君きみはこのおちんちんで、女の子とセックスがいたいよね。へえ……。じゃあ、どっちとセックスがしたい？ 教おしえてくれる？」

甘川あまかわゆうこは子供こに語かたりかける母ははおや親ののそれだが、しかし明らかにそれとは違ちがう好こう色しよくさがくつきりと現あれている。

アンズ「え、えっと……」僕ぼくは甘川あまかわゆうここと春草はるくさなずなの両方りようほうを見た。「あの……2人どうじ同時にどうじにしたいです。一いっしょ緒にセックスがしたいです……」

僕は本気ほんきで迷まよってしまった。1人ひとりを選えらぶなんて僕ぼくには無理むりだった。2人どうじと同時にセックスがしたかった。

そうしているうちにも僕ぼくのおちんちんはどんどん膨ふくらみ、角度かくどを付けていった。最初さいしょは甘川あまかわゆうこの掌てのひらに持もち上あげられていたおちんちんは、もう独力どくちよくで立ち上たがって亀頭きとうが真ま正しよう面めんを向むいている。まるで目の前の女の子よつきゆうに欲求よつきゆうを突つきつけるように。おちんちんがそんなふうふうに膨ふく

らむごとに、僕の性的欲求はどんどん高まった。

春草「おちんちん1本しかないのに？」

春草なずなが愉快そうに微笑んだ。

甘川「欲張らないけないおちんちんね。なんでも欲しがるのはよくないわよ」

甘川ゆうこが僕のおちんちんをしっかりと握り、ぬちやぬちやと音を立てながら掌を前後させる。

春草「そんなにふにやふにやしてないで。男の子っぽく腰に手を当てて、胸を張って、ほら、この立派なスケベチンコ、みんなに見せてあげて」

僕は促されるままに、一歩前を出た。甘川ゆうこと春草なずなが、自分の姿が陰にならないように、少し左右に位置をずらした。僕は仁王立ちになり、胸を張り、腰のおちんちんを突き出すポーズになった。

すると——二〇数人の女の子達の視線が正面に来た。みんな僕を見ている。瞳だけではな

く、カメラやスマートフォンレンズも僕に向けられている。レンズも目とカウントすると、いったいいくつの目が僕のいやらしい勃起おちんちんを弄られている姿を見ていることになるのだろう。

ぼ、僕、おちんちんを弄られているところを、女の子達に見られている。オナニーやフェラチオを観察されるのは違う恥ずかしさがあった。でも、たまらない……見られるの、凄く気持ちいい……。高まつちやうつ！

よくよく見ると、女の子達のほとんどが股間に手を当てていた。スカートの上から何でもない感じに手を当てて、周りに気付かれないようにスリスリしている子（正面から見ると丸わかりだった）や、スカートを巻くつて、パンティの中に指を入れている子、お隣同士で股間を刺激し合っている子もいた……。この場にいるみんな、いやらしい気持ちを抑えきれなくなっていた。左手を見ると、京森アスカも壁にもたれかかって、オナニーしていた——僕の視線に気付いて恥ずかしげに微笑みを返してくれた。

もう部室全体が露骨な性の香りでモヤモヤしていた。二〇数人の思春期の少女から発せられるフェロモンが、狭い部室内で濃厚に混じり合って充満していた。夕暮れの黄金色に輝く光を浴びていると、部室が現実から切り離された別世界にあるように感じられた。

僕はそんな幸福な空気を感じながら、猛烈に昂ぶるのを感じた。

アンズ「あふう……」

2人のうちのどちらかが、僕の亀頭を口に入れたんだ。亀頭を口内で刺激されながら、おちんちん本体がシコシコされ、陰囊も会陰も肛門も探られている。視界の外だとどこを刺激されているかわからないし、次どこを刺激されるかもわからない。すると不思議なことに、おちんちんを探られる感触がいつもより増幅して高まってくるようだった。

僕は目線を下げた。どうやらフェラチオをしてきているのは甘川ゆうこらしい。甘川ゆうこが僕の亀頭を口に入れて、ゆるゆると頭を振っていた。

春草「ああ、ダメダメ。こっちじゃなくて、みんなのほうを見て！」

春草はるくさなずなが僕ぼくの目線めせんに気付きききづ、窘たしなめてくる。

アンズ「ごめん」

僕は言われたとおり、腰こしに手を当てて、目の前の女の子達を見る。

女の子達の情熱じょうねつ的な目線めせんが僕ぼくを視姦しかんする。実際じつさい触さわられてるわけじゃないけど、視線しせんで僕の内面ないめんを探さぐってくる気がする。その状態じょうたいで視界外しかいがいでおちんちんを探さぐられると、身体的しんたいな快樂かいらくとは別の、新しい何かなにが開ひらくような気がした。

アンズ「はあ……あふつ……ふん……はあ……」

僕は股間こかんから這はい上があってくる快樂かいらくにビクンビクンと体をよじらせる。どうにか腰こしには手を当てたままだけど、全身ぜんしんがふにやふにやする。フェラチオの経験けいけんはそれなりにあるつもりだけど、今までとは別種べっしゆの快樂かいらくが、ビクンビクンと全身ぜんしんを貫つらぬく。それを感じるたびに、僕はクネクネと踊おどってしまった。

僕のおちんちんがどういう状況じょうきやうなのかよくわからない。ただネチネチと攻せめられている。

亀頭きとうが右へ左へと受け渡わたされ、舌でチロチロと攻められていると思ったらいきなりフェラチオが始はじまる。かと思ったらおちんちんの両側りょうがわからペロペロされる。次どこを、どう攻められるのか予想よそうができない。するとおちんちんがやたら敏感びんかんになって僕を狂くるわせる。

春草「ほら、何か言わないと。お客さん飽あきちやうよ。みんなをもつといやらしい気持ちにさせて」

春草はるくさなずなが僕ぼくに指摘してきをする。

僕は、「う、うん」とうなずきこちなく頷うなずいた。

アンズ「あ、あの……みんなに見守みまもられながら、おち、おちんちん、弄いじられています。はあ……凄すごい……エッチな感じ。2人の手も、口も、すごく……エッチで……ああ好き。おちんちん幸しあわせ……。うううん、おちんちん弄いじられると、すごく幸しあわせになつちやう……。はああ、嬉うれしい、スケベをすると嬉うれしくなつちやう……」

僕はたどたどしく言葉ことばを紡つむぎ始はじめめた。こんなにたくさんしあわの女の子を前にして、フェラチオ

をされながらスピーチするなんて……。恥ずかしさと興奮で、言葉が奥に引っ込んでしまいう。股間も胸も背中もゾクゾクする。でもそれは否定的な感じじゃなくて、柔らかな温もりを伴った幸福なものだった。僕はそのゾクゾクをもっと全身で浴びたくて、貪欲になっていた。アング「あ、あのね、今日は、ありがとう……。んっ……。ハアハア、みんなに招待されて、衣装部にやって、きて……。みんなに見守られながら……。はああ、エッチなことができて、僕、幸せ……。です。ぼ、僕ね、エッチな動画を、一杯、一杯……。うんっ……。はう、おちんちん気持ちいい……。でも、今日が一番だよ。今日がい、一番おちんちんが気持ちいい……。一番幸せ、だよ。ねえ、みんな。もつとエッチなこと……。うっ……。ああっ……。！ エッチしようね。僕、ここにいるみんなと、エッチが、した……。い……。みんなでこの気持ち……。共有しよう……。みんなで幸せ……。に、なろう。……。はう……。ああ、おちんちん、幸せすぎて、また射精しちゃいそう……。！ 幸せ一杯の精液だしちやうよおお！」

僕は快感にのたうって全身をクネクネさせながら、どうにかこうにか言葉をつむいだ。伝わ

たかどうかわからないけど、僕の気持ちだった。誠実な想いだった。僕は今、たくさんの女の子達にエッチな姿を見られて幸せだったし、それでみんながエッチな気持ちになってくれているのが嬉しかった。もつとこの気持ちをお裾分けして、深く共有したい。一人一人にきちんと幸福を届けたい。だから——セックスがしたい！ ここにいる全員と！ 幸いにして僕は絶倫だ。それだけは自信があった。ここにいる全員とセックスするんだ……これがいま僕が心に定めた「目標」となった。

春草「はい、いいよ。今の、凄く良かったよ」

春草なすがねぎらいの言葉を僕にむけた。

おちんちんへの感触が変わる感じがあった。一区切りが付いたらしい。視線を下に向けると、甘川ゆうこと春草なすが僕の陰囊を二人で持ち上げるように撫でながら、僕を見上げていた。僕のおちんちはもう完全復帰していて、ツンと上を向いてとろーりといやらしい粘液の糸を垂らしていた。

春草「すごくエッチで変態的なスピーチだったよ。私、いやらしい気持ちになっちゃいました」  
春草「なずなは温かく言っつて、僕の亀頭にキスし、そこにまとわりついた粘液をチュツと吸  
つた。」

甘川「君の気持ち、みんな嬉しかったと思うよ。セックスしようね」

甘川「ゆうこも母性たつぷりな優しさを込めて言い、僕の亀頭をちゅつとキスし、唇はすー  
つとおちんちんの根元へと降りて行った。僕はたまらず「はあああ」と腰をくねらせながら露骨  
な声を上げてしまった。」

つづきは本編で！